

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

がん研有明病院大腸外科での国内外科研修を終えて

琉球大学大学院消化器・腫瘍外科

宮城 良浩

この度、日本臨床外科学会国内外科研修プログラムにより、令和3年3月15日から3月26日までの2週間、がん研有明病院大腸外科において国内研修をさせていただきました。このような貴重な機会をあたえていただきました、日本臨床外科学会 万代恭嗣会長、国内外科研修委員会 高山忠利委員長に深く御礼申し上げます。そして、コロナ禍で緊急事態宣言下の状況であったにも関わらず、今回の研修を受け入れてくださいましたがん研有明病院院長 佐野武先生、大腸外科 福長洋介先生、スタッフやレジデントの皆様にご心から感謝申し上げます。

私は現在琉球大学病院で診療にあたっていますが、大学病院では併存疾患などリスクの高い症例が多く、たくさん手術から技術や考え方を体得していく経験が不足しがちになるので、今回の研修ではぜひ多くの手術が見学できる施設で研修をしたいと考えていました。がん研有明病院大腸外科は初発大腸癌に対する手術が年間700例以上と、国内有数のhigh volume centerであり、その要望を十分に叶えていただけたと考え、研修先に希望しました。実際に研修させていただいた2週間でも、前半1週間は緊急事態宣言中でしたが、週5日毎日手術が行われており、見学に入れただけでも24例と、毎日見きれないくらい多くの手術が行われていました。3件並列で行っていた日もあり、全部見られないことがかえって悩みになる程でした。定型手術も当然間隔をおかず行われているので、初見の私でも日を追うごとにがん研方式の手順や考え方を少しずつ理解していきました。

直腸癌手術については、ロボット手術やTaTMEも見学する機会に恵まれました。当科でも今後ロボット手術の導入を目指しており、webの手術動画だけではわからない実際の助手の動きなどを見て学ぶことができる貴重な経験となりました。ダブルコンソールで行われる場面もあり、手技習得に有意義であるように感じました。TaTMEは2チームで行っており、BMI30の症例であったにもかかわらず手術時間が3時間台と、非常に低侵襲な手術で感激しました。

こうした多くの手術見学に加え、カンファレンスにも参加させていただきました。消化器外科カンファレンスでは大腸外科に加えて食道外科、胃外科、肝胆膵外科のプレゼンテーションも聞く機会があり、手術方針について闊達な意見交換が行われていました。また、大腸外科カンファレンスでは、消化器内科や放射線科など、連携をとる各科の先生方も参加され、他県からも患者が集まる施設ですので、個々の生活環境なども考慮した上で、手術だけでなく化学療法や放射線治療などを含めた総合的な方針が検討されており、非常に勉強になりました。直腸癌に対するWatch and Wait療法など新しい治療法にも積極的に取り組まれており、こうした取り組みの積み重ねでエビデンスが創出、発信されていると感じました。

こうした多くの症例、最先端の治療に加えて、今回の研修で大きく刺激を受けたのがレジデントの先生方の存在です。S状結腸癌やRS直腸癌症例は下部消化管分野の技術認定医審査対象術式であり、レジデントの先生方が執刀を担当していましたが、日々の診療の中で自分と同世代の先生方の手術を見る機会が最近不足していたので、手術手技を自分と照らし合わせ、自分にはないものを学び取ったり、自分も負けないように頑張らなくてはと気持ちを引き締められました。カンファレンスにおいても、レジデントの先生方が症例ごとにパワーポイントを用意しているのですが、ポイントが的確に押さえられており、

発表も流暢なので聞いている側の理解が非常にスムーズに進み、深い内容までディスカッションすることが可能になっていました。大学病院では実習の学生もいますので、同じ形式をそのまま当てはめることは難しいと思いますが、ぜひ参考にしたいと思えるプレゼンテーションでした。

今回の研修で、high volume centerでの診療の実際に触れ、参考になる点が多くありました。また、同じ施設にとどまって日々の診療をこなしていく中ではなかなか意識することが難しい点について、立ち止まって自分自身を見つめなおす良い機会になりました。

最後に、ご推薦いただいた琉球大学大学院消化器・腫瘍外科 高槻光寿教授、快く送り出してくださいました教室員の先生方に感謝申し上げます。今回の経験は外科医人生の財産となり、これからの診療への新たなモチベーションを高める良い機会になりました。今回の研修での学んだこと、考えたことを、これからの自分の手術、診療に生かせるよう精一杯がんばります。